

例会記事

十二月例会 十二月十七日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

(十二月例会は蘭学資料研究会との合同で行なわれた)

一、幕府医学館の考試弁書『癩癩狂弁』について

— 当時の精神病学説をみる —

二、肉食及び菜食と仏教との関りあいについて

— 日本とインドとの比較 —

三、現代文「蘭学事始」と四十年余

一月例会 一月二十一日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

(一月例会は蘭学資料研究会との合同で行なわれた)

一、蘭医ボンベと日本—ボンベ書簡を中心に— 宮 永 孝

二、江戸時代の儒者と蘭学者の交友 齋藤竹堂の場合

富士川 英郎

二月例会 二月二十五日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一、ボンベがもたらした頭蓋骨のその後の現地調査

神谷敏郎・金沢英作

二、講座制の歴史

三月例会 三月二十四日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

(三月例会は蘭学資料研究会との合同で行なわれた)

一、尾本涼海(公同)について

田崎 哲郎

二、三浦梅園の手紙—麻田剛立に—について 小川鼎三・酒井シツ  
三、明和八年三月四日 緒方 富雄

四月例会は総会に替える

例会講演要旨

前野良沢と杉田玄白

緒方 富雄

一 前野良沢(一七二三—一八〇三)については岩崎克己氏の古典

的な著書『前野蘭化』(昭和十三年九月(一九三八))に詳しい。

これから述べることは一部同氏の著作と重複するところがある

が、このたびの前野良沢没後百八十年記念会の機会に特に杉田玄

白とのかかわりあいに関点をあわせて良沢を想起したい。

杉田玄白(一七三三—一八一七)の「蘭学事始」(一八一五)に

良沢のことが出てくるのは、蘭学の発達の記述のはじめの方で、

「翁が友豊前中津侯の医官前野良沢といへるものあり」

にはじまり、その性格を「天性奇人」とし、玄白との出遇いまで

の経歴をかなりくわしく書いている。

二

そして、明和三年(推定)の春、ちょうどカピタンが江戸参府  
で本石町の長崎屋に泊っていた時、良沢が玄白の宅を訪れて、こ  
れからカピタンにあいに行くが、一緒に行かないかと誘う。玄白  
は好奇心をそそられ、良沢にとまなわれて出かける。それが、玄

白がオランダ人に会った最初とおもわれる。そしてこれが玄白が蘭語を学び、同志とともに蘭学を開ききっかけとなる。

### 三

明和八年（一七七二）の春、カピタンの一行が江戸に来ていた時、中川淳庵がその宿（長崎屋）で誰かから、蘭語の解剖書「ターヘル・アナトミア」と、「カスバリユス・アナトミア」の二冊を見せられ、読む人があればゆずってもよいといわれる。

淳庵はそれを持ちかえり、玄白に見せる。玄白はそれらを手に入れたくおもうが、買うほどの資力がない。そこで、玄白は藩の太夫岡部新左衛門にうちあけて、藩のおカネで買ってもらう。

### 四

この年の三月三日夜、町奉行曲淵甲斐守の家士得能万兵衛からてがみが届き、明三月四日千住骨ヶ原（現在の小塚原）の刑場で腑分があるからとの知らせである。玄白は、良沢にもこのことを知らせてやって、同道をすすめる。

翌三月四日朝、玄白が集合の約束の浅草三谷町出口の茶屋へいくと、良沢もすでに来ていた。

その場で、良沢は懐中から蘭書を一冊とり出し、これは「ターヘル・アナトミア」といい、先年長崎で手に入れた解剖書であるといつて見せる。それは偶然にも、玄白が昨日入手した「ターヘル・アナトミア」と同版である。玄白は「事始」で

「これ誠に奇遇なりとて、互ひに手をうちて感ぜり」とある。

### 五

「ターヘル・アナトミア」という書名は、原本の書名ではな

い。原本は

Onleekundige Taelen

で、しいて当時風にカナで書けば

オントレードキュンジヘ・ターヘレン

となる。ターヘレンがターヘルになることはありうるとして、オントレードキュンジヘ（形容詞、「解剖学の」の意）が、「アナトミア（解剖学）」になるあとをたどることはむずかしい。ただひとつ、同書の絵扉にラテン語で Tabulae Anatomicae (Tabula Anatomica の複数形) と出ている。それが誰かによって「ターヘル・アナトミア」ともじつてよばれるようになったのかも知れないと考えられないことはないが、それにしてもその過程は、あまりに語学的でなさすぎる。

ところで、このような原本の書名といちじるしくことなつた呼び名が、どこでできたか、そしていつころか？

良沢が三月四日の朝、茶屋で玄白にこの本を見せたとき、「ターヘル・アナトミア」といったとされるされており、一方玄白が淳庵から同じ本を見せられたとき「ターヘル・アナトミア」という書名をきかされたように書かれている。わたくしは、このような記載を説明しうる可能性はつぎの二つのいずれかとおもう。

(一) この本を長崎の蘭人がそう呼んでいた。

(二) 玄白が後日「蘭学事始」を書いた時点でいつの間にか

「ターヘル・アナトミア」という通称がおこなわれてし

まっていた、それを玄白は回想のなかで明和八年三月

三、四日の時点ですでにそのように呼んでいたように書

いた。

わたくしには(二)の方が自然のように考える。

このようなきわめて日本的な名称の変化は、蘭人にはできないこととおもう。

六

玄白の「蘭字事始」には、前野、杉田、中川等がこの「ターヘル・アナトミア」の翻訳に苦心したことが感動的に述べられている。そのなかで有名なのは「鼻」の部分で、「フルヘッヘンド」という蘭語の意味がわからなくて苦心する記述がある。

玄白はこのように書いている。

「また或る日、鼻のところにて、フルヘッヘンドせしものなりとあるに至りしに、この語わからず。これは如何なることにてあるべきと考へ合ひしに、如何ともせんやうなし。その頃ウヲールデンブック(釈辞書)といふものなし。漸く長崎より良沢求め帰りし簡略なる一小冊ありしを見合せたるに、フルヘッヘンドの釈註に、木の枝を断ち去れば、その跡フルヘッヘンドをなし、また庭を掃除すれば、その塵土聚まりフルヘッヘンドすというやうに読み出だせり。これは如何なる意味なるべしと、また例の如くこじつけ考へ合ふに、弁へかねたり。時に、翁思ふに、木の枝を断りたる跡癒ゆれば堆くなり、また掃除して塵土聚まればこれも堆くなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、フルヘッヘンドは堆(ウツタカシ)といふことなるべし。然れば、この語は堆と訳しては如何といひければ、各々これを聞きて、甚だ尤もなり、堆と訳さば正当すべしと決定せ

り。その時の嬉しさは、何にたとへんかたもなく、連城の玉をも得し心地せり。」

わたくしには、この感動的な記述にかかわらず、なにか疑問がある。それは、良沢が長崎で求めてきた「小冊子」のことである。玄白は当時はウヲールデンブック(釈辞書)(Woordenboek)すなわち辞書がなかったという。その当否は別として、良沢が長崎で求めたという「小冊子」に、このようなくわしい説明がついていたとは考えにくい。玄白が引用している内容は、くわしい、大きな辞典でなければ見出せそうもないものである。わたくしは、玄白のいう「小冊子」の本態をつきとめていないので想像の域を出ないのは、おしい。

この「フルヘッヘンド」についてももう一つ疑問がある。

この語は、ターヘル・アナトミアの「鼻」の部分には、このままのは出てこない、これに近い意味の語としては *voornisiekend* と *verheven* がある。「鼻」の記載の最初の部分には前者がつかつてある。ドイツ語原本ではともに *erhaben* (もりあがった) である。文法的にいえば「フルヘッヘンド」に *verheffen* (動詞) の進行形の *verheffend* に当る。意味は近いが、語型としては、ターヘル・アナトミアには出ていないのである。

この食いちがいは、おそらく玄白の記憶のなかでの混乱であるう。

このように厳格につきとめていけば語学的には正確でないところがあるが、「このようなことがあった」という懐古談としてうけとれば当時の苦心談として、われわれを感動させるものであ

る。

ちなみち、「四年の間、草稿を十一度まで認めかへて」板下に渡したという「解体新書」のこの部分（鼻編第十一）はつぎのようになっている。

「○夫、鼻者隆起<sup>ツチ</sup>而居<sup>ス</sup>面之中口上額下<sup>ニ</sup>」

すなわち「フルヘッヘンド」は「隆起」のなかにとけこんだかたちである。

## 七

前野良沢は、かつて太宰府神社の神前で、自分は和蘭の術に従事しているが、いやしくも道をきわめずに、みだりに有名になる手段にはしたくないと誓ったという。良沢があれだけ深入りして「解体新書」に、玄白が「序」を求めたところ、この理由でこわったという。

それはそれとして、良沢が「解体新書」の訳述にどのようなかたちでかわったかは、「新書の訳文」のなかでさがし求めるよりほかない。「新書」に訳述の不備が見つかるが、それらすべて良沢のせいにすることはできない。むしろここまでにままとまったことは、良沢の勞に負うところが大きいにちがいない。

（本講演は昭和五十八年十月例会にて発表した。）

## 江戸医学館の考試弁書『癩癩狂辨』について

——当時の精神病学説をみる——

岡田 靖 雄

ここにとりあげたのは、医学館における精神病学答案集という

べきものである。二三名分のうち一四名分の名がはいっていて、そのなかに桂川甫悦（のち藤澤次謙、一八三五—一八八一）および多紀安琢（元琰、一八二四—一八七六）の名があるので、一八五〇年（嘉永三年）ごろのものか。とじこまれている最初に「癩癩狂辨校字」がついていて、各篇について文章・用字を批評し、また「癩癩狂辨批語」は主として内容を批評している。

ほとんどが白文の漢文であるので、全篇をよみくだしてはいないが、その内容は、「癩」、「癩」、「狂」のそれぞれの概念、病態生理（漢方医学的な考え方）および治療法を、「素問」、「靈樞」、「難経」などを引用して論じているものである。だいたいのものは、「癩癩」は一病であるが、一〇歳以下の癩癩を「癩」といい、成人のそれを「癩」というとしており、「狂」を精神病であるとする。自分の経験にほんのちよつとでもふれているのは二篇だけである。「癩」および「癩」を異病としていて、「批語」に、その説当をかくなどかかかっているものが四篇ある。

これらから察すると、医学館では、癩・癩・狂とはこういうものだ、という形ではおしえていない。古典の読み方をおしえていて、それらからなにつかみとるか、まなぶ者にまかされているたようである。つまり、江戸医学館における教育は、考証派とされる多紀家の学問の方法にそったものであった。

岡田の報告要旨は右のようなものであった。岡田は演題をはじめ「幕府医学館……」としていたが、宗田一氏は、医学館の刊行物には「江戸医学」とはいつていたし、固有名詞として「江戸医学館」の名をつかっていることが適切であることを指摘された。ま